

「大阪に住んで半世紀以上、生を受けた京都以上に愛着を感じる大阪で……」とは、御著書『大坂名医伝』の「あとがき」に先生御自身が記されているところである。本書は『大坂医学風土記』、『大坂蘭学史話』とならぶ先生の大阪医学史三部作の一つであるが、これらの御著作に一貫して流れているものは、大阪という町とそこに住む町人、とりわけ医師に対する限らない愛情であろう。先生のいま一つの大坂関係の異色の御著書『大坂医師番付集成』も、町人の町大阪に生きる市井の学医を以て任ずる先生ならではの御作と思う。

先生の御著作の中の異色は『錦絵医学民俗志』であろう。先生が大正末年頃より昭和三十年頃までかかって集められた医事関係の貴重な錦絵の一大集成であり、肌で感じる生きた医学史の資料として、その意義はきわめて大きい。雨に濡れた御葬儀の日を思い、先生のありし日の温顔を偲びつつ。

昭和六十三年二月

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

中野操先生を偲んで

酒 井 シ ヅ

中野先生が逝かれてから、はや二年の歳月が過ぎようとしている。遠い地に住むため先生にお目にかかれるのは、一年に多くて数回と数えるほどであった。が、お会いすれば、いつも温顔で迎えられ、問えば何でも答えて貰える頼りある存在であったし、その博識に驚かされたものである。

しかし、ことが医史学会に及ぶと、理事ならびに関西支部の支部長として、ときには辛言を戴き、恐縮することが多か

った。本学会にとって大久保彦左衛門のごとき貴重な存在であったのである。

先生はお若い頃から医史学の論文を発表され、ご長命であられたことから、残された論著の数は多い。しかも、随筆ひとつとっても、先生によって発掘された資料がその根拠となつているために見落とすことができない。先生の著作集が出るのが待たれるが、せめて、完全な著作目録が出来れば、先生の警咳に接する機会のなかつた、若い、後に続くものにとつても先生の大きな存在が語り継がれることになるであらう。

しかし、すでに刊行されたものの中で、先生の『医事大年表』は他の類書をはるかに凌駕している。この本の初版が出たのが戦時中であつたために、昭和十七年から昭和四十六年までを第二版で追記された。それは再版が出たときすでにかなりご高齢であられた先生にとって大変な仕事であつたと拝察している。しかし、その後、時代は大きく変動して医療行政は複雑になる一方である。それだけに『医事大年表』の、次の増訂年表を出すことがいま一番待たれる。

先生はこの年表を一人で作られたが、その時代と違って、いま大勢の人がいろいろな領域でそれぞれ活躍している。それだけに、このような仕事は、これからはとても一人ではできないものではない。有志が集まり、標準となるものを作るのが、先生への供養になるのではないだろうかと思ふ次第である。

(順天堂大学医学部医史学研究室)